

新しい家族の形 グループホーム

茂木 好子

知的障害者のグループホーム「はなのいえ」は二〇〇〇年五月に開所した。今年五月に十周年を迎える。福祉の長い歴史からみたら、ささやかな私の体験だが、この間に感じたことを述べてみたい。

1 寄せ集まりの疑似家族

私の前職は養護学校の教員である。その時に知り合った生徒やお母さん達と付き合い合っているうちに、グループホームの必要性を感じた。グループホームを作って一緒に暮したら、きつと楽しいだろうと考えたのが始めた動機である。

四人のメンバーは当時二一才から三十才。それぞれのところから、「はなのいえ」にやってきた。Aさん、Bさんは付き合って六年のカップルとして同じ通勤寮からやってき

た。Cさんは身を寄せていた親戚のおばさんが亡くなって、しかも失業中の身であった。Dさんはそれまで居た他区のグループホームから、より実家に近いこのホームへと移ってきたのだった。そして私の家族。夫と、当時は次女も同居であった。全くの他人が集まって同じ屋根の下に住み、同じ釜の飯を食べ、新しい人間関係を築くことになった。四人は四様に、自分のそれまでの生きてきた歴史を語ってくれた。食事も金銭管理も、精神的支えもすべてはこの世話人に任せることになったわけだから、今にして思えば当然のことだった。「今までの私、今までのオレのことをちゃんと分かって、支援してよ」というメッセージだったのだと思う。小、中学時代にイジメにあったこと。学校の先生がえこひいきしたことへの怒り。施設での不当な扱い。家族の中での葛藤。親との別れ。小学校で勉強が分からなくて辛かったこと等々。一年以上も繰り返し繰り返し話す人もいた。辛いことばかりではない。養護学校の行事の楽しい思い出などもちりばめられていた。

しばらくは新しい環境になじもうとする努力で一杯だったメンバーも、半年ほど経つうちに、一緒に暮らす相手の欠点が気になりだした。「あの人は部屋が汚い」「朝から大きな声を出して、うるさい」等と訴えてきた。集団生活でこのことが乗り越えられないと、居

心地の悪いものになる。私は相手の良いところや障害について説明し、認めあえるようにと話した。そして私も含めて誰もが欠点のあることを。「挨拶がきちんと出来ないようでは大人とは言えない」とか、「好きにならなくても良いから、嫌いにならないで」等とも。時間がかかっても彼らは私のアドバイスを受け入れようと努力してくれた。朝夕一緒に食卓を囲み、おしゃべりを繰り返すという時間の積み重ねが彼らの努力を实らせてきた。気の合わない人にも「おはよう」の挨拶がスムーズにできるようになってきた。

2 もう一度生き直す

育った環境が厳しく、たった二十年の人生に辛いことの方が多かったAさん。Aさんは数年して頭痛がひどくなり、会社も辞めることになった。それから約三年という間、いわゆる在宅となった。Aさんの「自分語り」を聞いてきた私は、ある日「私はお母さんにはなれないが、私のできることはなんでも応援するよ」と言わざるを得なかった。Aさんが「お母さん（十二才の時に亡くなった）が生きていたら、一緒にお出かけしたかった」「私は新しい自分になりたい」と言ったからである。それからは、Aさんの大好きな歌手浜崎

あゆみの会社を訪ねたり、浜崎の海の家を探しに湘南に通ったりした。浜崎のコンサートにも彼氏と一緒に出かけようになった。そういう日は不思議と頭痛が出なかった。休んでいる間に、Aさんはネイルアートや、ピアスにも興味を示した。それまで封印していた若い女性としてのおしゃれの目覚めだった。Aさんへの支援は手探りで、難しい支援を求められたが、「私とAさんの関係作りに必要な時間」と思うように努めた。しかし、常に一人での支援でいつも同じ家に暮らしていると、穏やかな気持ちを保つことができない時もあった。幸いなことに、周囲の理解者のおかげでなんとか乗り切れた。Aさんの体調もだいぶ回復し、三年の時を経てAさんは作業所に入所した。「私はずっとここ（はなのいえ）でゆつくりしたい」と言っている。まだ完全な回復とはいかないが、作業所での居場所も確かなものにしてきている。

3 願いをかなえる

グループホームの役割は障害者の自立を支えることである。何らかの自立であろうか？
まずは親からの自立だと私は考えている。「親無き後」という言葉があるように、まだま

だ年老いた親が子の将来を安心してゆだねることへの不安が解消されていない。イジメられたり、差別されたりと不当な扱いをされたことの多かつた彼らが自分らしく振るまい、安心して生きていけること。私はそう願って過ごしてきた。そのことを実現するためには、なんでも話せる場をつくることであつた。彼らが自分の歴史を語り尽くして、その先にあつたのはそれぞれの人の願いの表出であつた。グループホームの年間行事として、周年パーティーや夏の旅行、ミニコンサートを開き、みんなで楽しむ時間も大切にしているが、一人一人その人らしい楽しみも可能な限り叶えたいと私は思った。Aさんについては前述した。Bさんは好きなソフトボールチームを作りたと言つて、本当にメンバーを集めて作り、今はそのリーダーとしてチームのパワーアップに力を注いでいる。そしてさらに、ホーム主催のミニコンサートに参加しているうちに「僕もギターの弾き語りをしたい」と言いだし、クラシックギターを習っている。三年続いたので十萬円のギターを買つた。ますます熱心に練習に励んでいる。さらに付き合つて十五年になる彼女、Aさんとのホーム内同居を実現させようとしている。入所当時は会社でもストレスで辞めたいと言ふことがあつたが、やりたいことが充実してからは会社でも自信を持って働き、頼りにされ

る存在になっている。Cさんは自閉的傾向があるが、会社の社長の温かい配慮の下、就労を継続している。稼いだ給料で春と正月の障害者団体の旅行に出かける。好きなスーツも時々新調する。入所当時に購入した念願のピアノのイス三脚も自室で大切に保管している。B君の率いるソフトボールチームのメンバーとしても活躍している。Dさんはコスプレ系の趣味の世界を楽しんでいる。繁華街に出かけることが多いので、夜七時には帰宅すること、外では決してお酒を飲まないことを守って貰っている。子どもの頃に習っていたピアノのレッスンも復活し、ミニコンサートでの演奏を励みにしている。

自立支援法では、障害者の就労に重点が置かれたが、就労の継続には様々なちからが必要である。その一つに仕事以外の楽しみの充実があるのだと思う。「はなのいえ」のメンバーの生き方を見ていると、つくづくその大切さを思わされる。

4 地域の中で

「はなのいえ」の周囲には高齢者も多く住んでいる。数年前まで、「資源ゴミ」の回収箱を出していた高齢の男性に代わって、Bさんがやってくれている。毎日の夕方、必

ず箱を出すということは結構大変なことである。そんな姿を見守ってくれているご近所の方がさりげなく声をかけてくれる。「君はえらいね」と。隣の奥さんは最初からの良き理解者。「このごろAさんが元気になったわね」などと伝えてくれる。開所当時は大きな声を出すCさんにヒヤヒヤした。私も町会の役員を積極的に引き受けるようになってきた。これまでのところ「はなのいえ」への苦情は聞こえてはこない。「はなのいえ」の近くには福祉園や作業所もあり、普段のおつきあいを重ねてきて、お互いの理解が進み心強い存在になっている。

月に一度のペースでオカリナ教室も開かれている。今では十四人のメンバーになり、ゆつくりだが、「故郷」や「聖者の行進」等がふけるようになった。他のホームの人や地域の人たちが参加している。年に数回の発表の場を励みに練習している。

私の古くからの友人、Nさんが月に一度最終日曜日に自宅で「夕食や」を開いてくれている。メンバーは親戚の叔母さんの家に行くように、その日になるといそいそと出かけていく。

今後とも様々な地域の方々と理解、協力を深めながら、安心して、協力しあい心ゆたかな

暮らしをしていきたいと願っている。

5 新しい家族の形

現代は障害を持っていない人々にとつてもとても生きにくい世の中になっている。家族力が低下し、お互いを認め合う関係が希薄になった。しかし、グループホームのメンバーは、職場で精一杯の力をだして働き、家に帰ったら愚痴やうれしかったことを聞き合いながら、お互いを尊重し認め合う仲間がいる。自分の好きなことにも没頭し、充実感を持つことができる。障害のあるなしに関わらず、このような暮らしが出来るということは誰もが願っていることだと思う。グループホームは今や、新しい家族の形の一つ〴〵ということができのではないだろうか？血のつながった家族のいる人は家族とのより良い交流も続けながら、ホームの仲間とのゆるやかなつながりを築いていけたら良いのではないか。様々な事情で家族との関係が疎遠になっている人は、安心できる居場所としてのグループホームで、これからも仲間とのつながりを豊かに築いていけたらと思う。

最後に

東京都のグループホームは国の制度に先駆けて制度化された歴史を持つ。自立支援法の下でも報酬単価の引き上げなどを行い、制度の充実に積極的な姿勢を示している。しかし、現場の支援者からみると、この制度が広がっていくためにはまだ課題が多い。利用者の所得保障の問題（福祉就労の人は今の収入では生活費が足りない）と共に、利用者への十分な支援のためには支援者の待遇がさらに改善されるよう願っている。支援者の仕事は目に見える食事作りや金銭管理などの他に、利用者の精神的な安定のための支援がとても重要である。一人で何もかもをこなし、高度な支援の力量・専門性が求められる仕事である。まずはこうした仕事を行政の方はもとより多くの人々に、深く理解して頂きたいというのが現場にいる私の実感である。